



■ 撮影者 中沢の夏まつり実行委員会

公募写真テーマ『祭り』

『中沢の夏まつり』は「中沢の子どもたちにふるさとの思い出づくりを!」というコンセプトをもとに、地域の皆さまのご協力により、令和4年度から開催している地域のお祭りです。

次号 館報『駒ヶ根』174号 表紙写真募集テーマ 『チャレンジ』



詳細は申込みフォームをご覧ください、各公民館へお問い合わせください。

※申込締切は令和8年1月8日(木)まで

豊かな感性と歓声を呼ぶ人形劇

みなさん“人形劇”にはどんな印象、思い出がありますか？今年6月駒ヶ根に移住した『アトリエ/劇団こがねむし』は1991年に東京で創立以来、オリジナルの音楽人形劇を中心に保育園・幼稚園・児童館や各種イベントで年間約150回公演。子どもたちに劇を楽しみながら生きものへの共感や豊かな感性を呼び起こしてもらえよう活動しています。

代表の小林英幸さんは人形を作り出す原型師でもあり、劇のシナリオも音楽も照明も全部を手掛けて舞台を作っています。小林さんが作る人形は、可愛い動物や海獣だけでなく、リアルな昆虫やゴジラやピグモン、ブースカなど有名な怪獣もたくさん。手のひらサイズから2mを超える大型怪獣まで自在に操るだけでなく、声優、音楽演奏、手品までマルチにこなして子どもも大人も思わず引き込まれ歓声を呼ぶお話を見せてくれます。

アトリエを訪れると、玄関では可愛い眼をした怪獣たちが出迎えてくれ、奥の部屋には天井まで届く大きな怪獣たち、巨大カマキリやダンゴムシ、ウルトラマンやオリジナルキャラクターねず忍チュー太くんなど部屋からあふれんばかりの作品に圧倒されます。

「移住前に仕事のストレスで18kg増えた体重が、駒ヶ根の美しい景色、美味しい空気と水、優しい人々との交流、小さな畑での農作業の日々を過ごし3か月で健康的に10kg落ちました！」と話す小林さん。

さらに「今後は、駒ヶ根ゆかりの『河童の妙薬』『早太郎伝説』や地元のお祭り、養蚕にちなんだ作品にも取り組み、人形劇を通して駒ヶ根や伊那谷の子どもたちに、生きものや生まれ育った地域に興味を持ってもらえるような交流ができれば嬉しい」と、すっかり駒ヶ根生活に馴染んだ優しい笑顔でこれからの計画を楽しく情熱的に語ってくれました。自然豊かな駒ヶ根の地で活躍する巨大昆虫や怪獣たちと子どもたちが交流する姿が見えるようでした。



小林英幸さん

公演依頼等お問い合わせ

『こがねむし』
ホームページ

菅の台の七名石

駒ヶ根高原の菅の台、切石公園には、切石・重ね石・地藏石・袋石・小袋石・ござ石・蛇石と名の付いた石があり、七名石と呼んで里人に親しまれています。

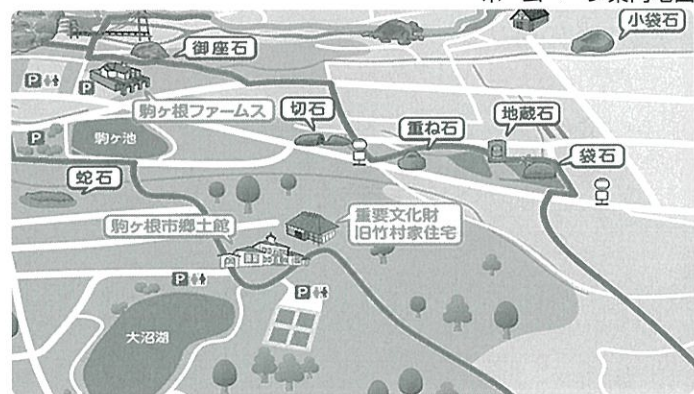
七名石は6～9万年前に氷河により『千畳敷カール』から『しらび平』まで運び出され、2万年前に土石流により駒ヶ根高原に運び出されたと考えられています。こうした石は『迷い子石』と呼ばれヨーロッパではよく見られるものの、日本にはあまり見られません。

現生人類が日本列島へ移住したのは4万年前、縄文時代が始まったのは1万2000～1万3000年前と言われていいますので6～9万年前・2万年前がいかに古い時代か理解できると思います。

切石は、刃物で縦に切ったように真二つに分かれている木曽駒花崗岩です。武蔵坊弁慶が試し切りしたという伝説や、坂上田村麻呂が奥州征伐の途中に立ち寄って石を切ったと伝えられていて、切石原・切石公園の名称の起源となっています。大きさは長径10.4m×短径7.4m×高さ3.1m（長径は2つの石の合計）もあります。

重ね石は、横に切ったように二つ重なり、重なり目に一本松が生えています。下の石の表面がぼくぼくしているところから疱瘡石と呼び、この石を擦ると疱瘡を病んでも軽くて済むと言われていいます。長径5.8m×短径4.5m×高さ4.3m（高さは上下の石の合計）

他の石の紹介は割愛しますが、それぞれに特色のある巨石です。古代を想像しながら、散策するのも楽しいのではないかと思います。

駒ヶ根高原砂防フィールドミュージアム
ホームページ案内地図

分館紹介 No.8

東伊那 伊那分館

2025年4月1日現在
364人

区加入世帯 112戸

当分館の最大のイベントは毎年9月に開催される『伊那耕地大運動会』です。今年で50回目を迎え、約20年ぶりに伊那森神社の境内で開催しました。5常会対抗で14種目を競い合い、花形種目の『ムカデ競争』と競技のラストを飾る『分館部員疾走』は、神社の外周（約240m）を1周します（昨年まではアルプスドームのトラック約104mを1周）。各常会の応援は最高に盛り上がり、ゴール後に疲れ切って倒れこむ選手を、皆拍手で迎えました。



永見山唄声の会

～集って歌って元気になろう～

『永見山唄声の会』は、地域の集会所で月に一度、季節の歌や、リクエストの歌を楽しむミニ歌声喫茶のような会だ。

きっかけは15、6年前にプロミュージシャンの夏秋文彦さんが永見山に移住されたこと。『永見山唄声の会』は会の名付け親でもある夏秋さんが、以来ずっと伴奏をしてくださっており、1回300円の会費で誰でも参加できる。他地区からの参加や、時にはお孫さんを連れての参加もあるそうだ。



夏秋さんの伴奏で歌う様子

当初から、この会を支えている世話役のお二人は毎回、地区43戸に会の開催案内を配っている。そこには地域のお祭りや季節ごとの農作業の様子など、身近でホットな話題も取り上げて載せている。9月で108号、今や永見山の瓦版といった存在で、会には参加しなくても、地区では広く知られており、楽しみに読んでいる方もいるようだ。



毎月発行しているお知らせ

唄声の会は、歌にまつわる思い出話に盛り上がり、健康体操や脳トレもしたり、かけがえのないおしゃべりの場になっている。「永見山の人たちは働き者で、天気が良くも悪くも、唄声の会に行くより野の仕事の人が多し。でも現在101歳になる大先輩は毎回参加してくれて、元気のお手本」とのこと。

そんな会を自分たちも楽しみながら続けているそうだ。

守り合える仲間づくりをめざして

毎年夏になると、家の前の道を高鳥谷山に登る子どもたちが通ります。さわやかなあいさつや野山に「ヤッホー」と呼ぶ大きな声に元気をもらいます。時には、夜のキャンプファイヤーの楽しそうな賑わいが響いてきます。しぶき荘さんが取り組む『アルプス子ども会』の活動です。

子ども会を経験したことから、この地に移住した方もいると聞き、会について詳しく知りたいと思い、二代目赤羽芳春さん・三代目亮一さんにお話を伺いました。

東京にいた初代が、取引先の看護師さんから「夏休みに子どもを遊びに連れていけない」と話を聞いたのがきっかけでした。「都会の子どもたちに田舎の生活を体験させたい」と、ゆかりのあった東伊那で活動が始まり、当初は幼稚園教諭をしていた初代の姉が17名の子どもを預かったそうです。コロナ禍でも保護者の要望に応え、子ども会を開催し続けて今年で51回目を迎えました。

芳春さんが嬉しいのは「繰り返し参加する子がいて、毎年その成長に驚かされること。年齢制限で参加できなくなった子が突然訪ねて来てくれること。親となって我が子を参加させる体験者がいること」だそうです。さらに、200名近い現役リーダーのうち半数以上が経験者とのこと。会での経験が心に残る魅力的なものだったとわかります。

子ども会には幼児対象の2泊3日コースもあれば、小学生から中学生まで年齢や期間、内容の異なる様々なコースがあります。最初は泣いていた幼児も「自分のことは自分でやる」姿勢が身についていくようです。驚いたのは、何も決まっていなかった白紙の状態からメンバーが本音で話し合い、遊びや食事作りなどを自分たちで決め進めるコースがあること。長いコースは14泊15日。

大人から与えられることが多く、自分で考えたり失敗から学ぶ機会が少ない現代の子どもたちにとって、かけがえのない日々になることでしょう。そして、そこで築かれる人間関係は、しぶき荘入口の看板にある「みんなの知恵と勇気を出して、お互いが守り合える仲間づくり」の理念そのものだと感じました。



みんなで作った牛乳パックの船 見事着水!!

伊那耕地の住民が一年で一番大勢集まるこの運動会は、お互いが元気であることを確認し合い、また伊那耕地に新しく入居された皆さんを歓迎し、知り合える機会でもあります。

今回は総勢151名が参加し、青空のもとで汗を流しながら、お互いの健闘を称え合いました。そして運動会終了後は、各常会ともブルーシートを中央に持ち寄り、待ちましたと大懇親会がはじまります。

皆が楽しそうに笑っているこの光景を、伊那森神社の神様も喜んでいることでしょう。

東伊那区 伊那分館主事 伊藤明穂



駒ヶ根市立図書館

館長 矢澤 勝義

5月に、こんな新聞の記事が目にとまりました。『本「読まない」小中学生4割強』この記事によると、大手教科書出版会社の調査で、小中学生の4割近くが全く本を読まないことが明らかになったということです。また、違う新聞の記事では、大人で全く本を読まない人は6割を超えたということが書かれていました。日本では、明治以降の教育制度の改革・整備により多くの子どもたちが等しく教育を受け、その結果、多くの人々が読書に親しみ、読書を通して多くの学びを得てきました。その国で、現在4割の子どもたちが、そして、6割の大人が、全く本を読みません。読書は、子どもの成長に大きくかわつていきます。読書を通して、子どもたちは知識を得たり、思考力をつけたりします。それだけでなく、自己理解力や主体的行動力、表現力なども向上させます。読書によって子どもたちは成長していくと言っても過言ではないように思われます。特に、中高校生の時期に読書を大切にしてほしいものです。思春期にあたるこの時期は、いろいろな悩みで心が不安定になります。大人とのコミュニケーションがとりづらいこの時期にこそ、読書の重要性が増してきます。それゆえ、中高校生の読書離れは深刻な問題です。



現在の駒ヶ根市立図書館

駒ヶ根市立図書館は、大正5年（1916年）に赤穂小学校講堂に、赤穂学校同窓会により「私立赤穂図書館」が開設されたことが始まりと言われています。大正12年（1923年）に「村立赤穂図書館」、昭和15年（1940年）には町制施行により「赤穂町図書館」と改名されました。さらに、昭和29年（1954年）には市制施行とともに「駒ヶ根市立赤穂図書館」として発足し、昭和36年（1961年）には「駒ヶ根市立駒ヶ根図書館」と改名されました。後に「中沢分館」、「東伊那分館」も設置されました。そして、昭和61年（1986年）に、駒ヶ根総合文化センター開館にともない、図書館も文化センター内に「駒ヶ根市立図書館」と改名し開館しました。今年で開館102周年、移設39周年になります。令和6年度は蔵書数183,185冊、登録者数11,547人、年間貸出冊数193,248冊、年間来館者数89,551人となっています。年間来館者数は年々増え続け、駒ヶ根市の人口の3倍に近づこうとしています。ご利用いただけます。ご利用いただいている皆様に感謝するとともに、改めて、市立図書館の必要性、役割の重要性を感じています。

さて、冒頭で述べました、子どもや大人の読書離れに対して、図書館では強い危機感をもっています。特に、子どもたちに読書の楽しさや必要性を実感してほしいと願い、「駒ヶ根市子ども読書活動推進計画」を立て、おはなし会、訪問読み聞かせ、ブックスタート・セカンドブック・サードブック事業、ワークシヨップなどいろいろな活動を通して、子どもたちの読書活動の推進を図っています。とりわけ、読み聞かせは、小さい頃に読み聞かせの経験が多い子どもほど、その後の読書量が多くなるといふ傾向が見られ、とても大切に行っています。これからも継続発展していきたいと考えています。



おはなし会でのパネルシアター

文末になりますが、読み聞かせ活動は、ボランティアと図書館司書で行っています。また、来館した子どもたちに配る折り紙や、本の清掃活動なども多くのボランティアの方々への支援に支えられています。お忙しい中、駒ヶ根市の子どもの読書活動を推進していただいているボランティアの方々へ改めて感謝申し上げます。

おはなし会でのパネルシアター

2025年は今までにない炎暑の長い長い夏だった。稲刈りが始まってからも、日中は外に出るのがためられる日々が続いた。気候変動の影響は加速度的になると言われている。米も野菜もその変化に合わせ、品種改良や栽培法の工夫が求められている。集中豪雨、山火事、多発、氷河湖決壊の脅威など世界中で起こりつつある様々な現象に、人類は対処していけるのだろうか？これからも瑞穂の国の秋を寿ぐことができるよう祈るばかりだ。

(宮下 満智子)

赤穂公民館 TEL.83-4060
中沢公民館 TEL.83-5125
東伊那公民館 TEL.82-4664

編集／駒ヶ根市公民館報編集委員会
発行／駒ヶ根市公民館協議会
印刷／株式会社宮澤印刷